
逃げた忍者は悲しみの魔王や正義の勇者と踊る

翡白 翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逃げた忍者は悲しみの魔王や正義の勇者と踊る

【Nコード】

N5847W

【作者名】

翡白 翠

【あらすじ】

忍者の里、そして、自分の国から逃げた忍者、コガネ。自分の国で、勇者に志願し、正義の勇者として、旅立つことになったフウセン。過去に戻りたいと考えながらも、もう戻れないと自覚する魔王。彼らは、物語の上で、どのように踊るのか――

pixiv様で連載してある物に、加筆修正されております。

プロローグ

プロローグ 忍者

コガネは、忍者になるための英才教育を施されていた。

コガネは忍者の里の長の息子として生まれた。

幼少期からの、過酷な訓練は、親の過度の期待からくるものではなく、忍者として生きていくために必要なことだと、コガネは親から教わっていた。

「父さん……なんで、俺はこんなことをやるんですか？」

と、親に聞いたときも、

「忍者になるからに決まっているであろう」

と、さも当然のように返されていた。

コガネが、少年、青年、となるうちに、その訓練はさらに過酷なものになっていった。忍者の里での友人と己を高めあうという、崇高な目的もあつたらしい。その過程で、コガネは友を得、技術を得、体力を得た。

だが、青年になる頃には、頭のなかに疑問の声がいつも響いていた。

——このまま忍者になっていいのか？

——ほかの道があるんじゃないのか？

——ほかのところを見てからでも遅くはないんじゃないか？

コガネは迷った。親に相談しても、里から出してはくれなかった。相談の翌日は訓練が一層厳しくなった気がした。

相談から、数週間がたった頃、コガネは里から逃げ出した。友と親を里に置き、技術と体力を使って逃げ出した。里の忍者の力を使えば、捕まえることは容易かっただろう。だが、コガネは捕まらなかった。

友人とあえなくなることに、寂しさを感じた。だが、過酷な訓

練への嫌気と、外の世界への羨望は、それを遥かに超えていた。外の世界に、出た時の、胸の高鳴りは、今でも覚えているらしい。

だが、外に出てからの道は、さらに厳しかったらしい。まず第一に、視線を感じる。里の忍者の監視があったのだ。それに、職がない、食がない。働こうにも、外の世界は不況だった。そして、忍者の技能と体力しかなかったコガネは、力仕事につくしかなかった。だが、その力仕事でさえも、働き手で溢れている。コガネが入る隙間はどこにもなかった。

コガネは考えた。そして決めた。視線から逃げ、職がある場所……
——噂で聞く、海外に行けばいいじゃないか。

こうして海外で、コガネは冒険者となった。忍者の技能を存分に扱えるということで、天職と言っても、差し支えはないだろう。

プロローグ 勇者

「お前に、この剣を託す……」

城の謁見の間に、威厳のある王の声が響く。

「はっ、有り難き幸せ」

勇者であるフウセンの声が響く。まだ、幼さが残る声は、国の政治部の人に聞かれることとなった。

「ついては、お前に魔王討伐任務を命じる。期限は設けない。魔王めを討伐して、この国を救ってくれ」

国王の依頼に対して、

「当然受けさせていただきます。魔王を倒し、国民の顔に笑顔を倒すのが、私の使命です。幼馴染二人と一緒に、討伐の旅に出させていただきます。」

勇者の声が謁見の間に響いたとき、盛大な拍手が巻き起こった。

「ということで、旅に出ましょう」

唐突なフウセンの発言に、ソラと、アカネは驚きを隠せなかった。

「はい……？」

「はー？」

二人は疑問の声を上げる。

「国王主催でやった、『魔王討伐コンテスト』これで、君が勇者だ！』に応募したんですよ。そうしたら、見事当選しまして」

「まあ、私は問題ない……フウセンとは、昔から遊んでいる仲だし、討伐の旅も別に止める人はいない……親はもういないし」

ソラが言う。ソラは孤児だ。現在はフウセンと二人暮らし。フウセンと旅に出ても、何ら問題はない。

「まじですかー」

アカネは親と暮らしている。簡単に旅には出れない。

「まあ、私もフウセンと旅にたいしねー頑張つて、親と交渉してみるよ。いい結果を待って欲しいね！」

アカネらしい元気な声で、答えた。

「まあ、この三人で旅にでたなら、楽しく道中過ごせるでしょう。ソラやアカネとの旅なんて、ワクワク感がありますしね」

「楽しみ……」

「おっしやー頑張つて、交渉するよー」

こうして三日後、勇者たちは、旅立ったのだった。

プロローグ、魔王

異形、異形、異形。異形のモノたちでひしめかれている、部屋。

魔王城の、作戦会議室。そこで、弁舌振るっている、ひとりの人間。正確に言うと、人間なのは見た目だけで、彼こそが魔王なのだ。

「今代の勇者が旅立った。先代、先々代の勇者は退けることが容易だったが、今代の勇者がそうだとは限らない。何より、王宮が血筋より、剣の腕や、魔法の知識などの選考基準で、民間から選ぶこと自体、稀というか、前代未聞と言っていいだろう」

その、魔王がハッキリと、言う。作戦会議室からは、ぶっ殺せー

等と、不穏な言葉が響きわたる。

「そして、魔王様、今回の作戦は、如何お考えで？」

魔王の近くに居た、側近らしき女……見た目だけは人間だが、実際には魔族だ。が、魔王に提言する。その声に、どうするんですかー魔王様ー？ とか、俺ら一族使ってくださいよー貢献したいですーとか、武功をあげたいのか、さらに魔族の声が大きくなる。

だが、当の魔王は、何も気にしていない様子を出し、

「今回は、シースの隊のモンスターをメインで使っていく。今回の勇者は、血筋ではないこともあってか、殆ど、いや、全くノーマークだ。情報収集に長けているシースの魔物を使うのが、手っ取り早いだろう」

「有難うございます。魔王様」

魔王の隣に居て、先刻魔王に提言した女が、言う。名前はシースというらしい。

「だが、シースの軍だけじゃ手薄なもの、事実だ。なので。○隊や、××隊も、シース隊の補佐として使う。また、予備兵力として、隊も、城内に待機だ！」

「○○○○は！！！！」「○○○○」

いくつ重なったかわからないほどの、大きな声で、魔族が返事をする。

「よし！ いい返事だ！ 今日解散！」

それに応えるように、魔王も大きな声で返す。満足したのか、魔族たちは扉を乱暴に開けて、部屋から出ていく。それを見ながら、

「頼もしいわね」

と、素に戻ったシースが言う。その目を形容するならば、自分の子供を慈しむ様な目で見ると、母親のようだった。

「先代魔王が、死んでから、苦節何十年以上。ついに魔王軍も戦力が整ってきたな」

魔王が言う。

「さて、俺は人間観察にでも行ってくるよ。現場の動向とかも知り

「たいからな」

「そう魔王はシースに言っと、魔王城から、転移魔法で転移していった……」

忍者 side 1 勇者 side 1

忍者 side 1

その場所では、酒、人、食べ物等の臭いが、充満し、独特の臭いを放っていた。そして、人々の怒声が飛び交い、喧騒と呼ばれるような雰囲気醸し出していた。その酒場のカウンターに、青年は座っていた。

「勇者ね、俺らにそこまで関係あるのか？」

「知るか、適当に情報をくれて言ったのはお前だろうが、この引きこもり冒険者が」

元忍者、現時点では冒険者のコガネは、おっさんと話していた。おっさんって表現しても、実際は筋肉隆々で、無骨な鎧を付けている。所謂冒険者だ。この酒場での実績も、コガネより高い。それでも、コガネとおっさんは、中堅クラスレベルの存在で、広い範囲に名が知れ渡っている、上級のクラスではなかった。

「引きこもりとはひどいじゃないか、ひと月程金に余裕ができていたから、食料を買い込んで、部屋で寝たきり生活を楽しんでいただけだよ」

引きこもりと称されたことに、多少憤りを感じたのか、コガネがおっさんに反論する。

「それを世間様では引きこもりと呼ぶんだよ」

当然だと言った様子で、おっさんは言い返す。コツコツ仕事をしていて自分と、時々大きな依頼しかやらないコガネが、同じ中堅ランクというのが、気に食わないのだろうか。

「いいじゃん、金はあるんだし、まあ、買い込んだ食料だと、干肉がメインの食べ物になるのが辛いかな」

大きな依頼を成功させ、その金で引きこもる。そんな生活サイクルを平然と語る。

「なら外に出やがれ、引きこもり」

「外に出るのが嫌だから干肉で我慢しているんじゃないか」

「まあ、お前に聞かれたとおり、最近の近況は伝えた。勇者がこの街に、魔王のヒントを得に来ること、そのおかげで、この街に勇者見物の観光客が多く来て、その護衛の冒険者も集まって、冒険者の飽和状態ってことだ」

依頼に対した冒険者が多過ぎると、依頼を受けられない冒険者が増える。コガネとおっさんは、見事に依頼を受けられない冒険者なようだ。ぱつと見二人ともパーティーを組んでいる人がいない。依頼を受けるには、パーティーを組んでいることは大きなアドバンテージになるのだ。

「それを俺の状況に表すと、金ない！ 職ない！ 未来もない！
ってとこかな？」

コガネは自嘲した。実際、ひと月の生活で、貯蓄はそこを付き、仕事である冒険をしようにも、依頼がない。

「だから、貯蓄くらいはしとくと、あれほど言ったんだがな」

「仕方ない、別の街にでも行くかな。ひと箇所では飽和状態ってことは、別の街では、足りないんだろう？」

「まあ、それも一理あるが、勇者様は行く村、行く町、行く街で人助けという名の依頼を達成しているらしいぜ。相場より安い価格で。そのせいで、俺らがない冒険者に下る依頼までもが、安くなりやがった。『勇者様ファックユー！』って叫びたいな」

「まじかよ……俺が豪邸で暮らすのはいつになるのかね……」

おっさんと青年の会話が勇者についてヒートアップしている頃、そこにいる酒場のマスターは、つぶやいた。

「まだ依頼がないとは言っていないんだがな……」

勇者 side 1

その頃、勇者は、旅していた。周りの視線が降り注がれるところ、

街にいたのだが、勇者、いや、勇者たちには、もうその視線に慣れていた。勇者のフウセンは言った。

「行く街、行く町で、人々の視線がすごいですね。僕たちに向けられた期待も分かるものです。早く魔王を倒さないと……」

焦るような声色だった。やはり世界を救うために立ち上がった男。一味違う気がする。確かに、民間上がりだが、民衆にそんなものはあまり関係がない。この苦境から救ってくれる可能性があるものだというだけで、尊敬の眼差しにはなるのだ。

「まあまあ、そんなに気にすることはないじゃん！ まだ旅は始まったばかりだし、魔王の情報も得ていない。急いだって、ろくなことがないよ！ 昔の人は言ったじゃないか、急がば回れてね」

勇者の仲間である、アカネは言った。勇者とは正反対の、軽快な口調で、楽観的な考え方だった。

「まだまだ、先が長いというのは同意します…情報を得ないといけないのも同意です。ですが、フウセンが言った、早く倒さなければというのも、否定する理由はありません」

これまた、勇者の仲間である、ソラが言った。形容してみるとすれば、生真面目という様な言葉が一番似合う、雰囲気と口調だろうか、軽薄なイメージは何もない。

「とりあえず、次の目的地に向かって、旅を続けながら、人々を救いましょう。魔王を倒すのだけが、勇者の使命では、ないですからね。」

彼らは先を目指す。魔物を倒しながら、魔王を倒すために。

忍者 side 2 勇者 side 2

忍者 side 2

コガネとおっさんは、酒場での話が盛り上がった。閉店時間に近くなっても、その話は終わっていないくなった。

店主は言った。

「そろそろ店じまいだ。早く出てけよ、ガキとおっさん」

「お客さんにそんな態度をとっていいのかい？ マスターさんよ」

おっさんは反抗した。というか、まだ話が終わっていないので。

ここで切るのは消化不良らしい。

「まあ、マスターもこういつていることだし、俺はそろそろ、家に帰るよ。じゃあな、マスター、ニセクロ」

今日初めて、コガネはおっさんの名前を言った気がした。

「なら、俺も帰るわ。コガネが居ない中で、マスターと話を咲かしても仕方がないからな」

そうして、おっさん改めニセクロが席を立とうとした時だ。鐘が――鳴った。酒場の入口上部に取り付けられている鐘が鳴ったのだ。

金を告げる鐘。依頼を告げる鐘なのか、閉店間際に来る不思議な冒険者なのか――

「いらっしやいと言いたいところだが、もう店じまいだ。早く帰るな」

マスターが、来客者に向けて言い放った時だった。三人は絶句した。入ってきたのは、形容しがたい程の美少女だったのだ。全体的に緑を基調としたゴスロリ風の服。だが、そこにあるのは、確かな意思。荒くれ者の巣窟にくるような顔をしていた。少し間をおき、彼女は言った。

「依頼を、受けていただけませんか？」

とても、綺麗な、透き通るような声だった。

「わかった。とりあえずここに、住んでいる町名、名前、依頼内容を書いて、すぐ帰れ。俺はさっさと店じまいして寝たいんだよ」

マスターは美少女がきたと言うのに、気にせず言い放った。彼の中では、美少女に丁寧な物腰で話すのより、深夜をすぎて、丑三つ時も超えた時に寝ることの方が大きいらしい。当然のことな気がしてきた。が、マスターは、酒場のマスターだ。昼夜逆転の生活をしていて当然ではないのだろうか？

「いえ、大衆型依頼ではなく、個人型依頼を、その彼に頼みたいんですよ」

マスターの睡眠に関する事など、我関せずとばかりに、彼女は言い放った。

「え？ 俺？」

コガネが、素っ頓狂な声で、疑問を口にした。

「チツ、俺じゃないのか」

ニセクロは、舌打ちをした。仕事がないから、仕方がないことだ。冒険者としても、仕事がないのはいただけない。

「大衆型依頼ではないのなら、ここを使わないでいただけませんかね。早く寝たいんで。というか、もう店を占める時間なんだよ、さっさとでてけ、おまえら」

完全に気だるそうにしているマスター。それを察し、マスターに悪い気持ちはさせられないな、と思った美少女は、

「すいません。では、コガネさんを連れ出しますね」

と、急かした。

「えっ？ というか、なんで俺の名前知っているの？」

当然な疑問を口にするが、それをほかの二人が気にすることはない。なぜなら、この世界にも情報屋という便利なものがあるからだ。「俺に仕事ないんなら、さっさと帰るわ。じゃあな、マスター、コガネ、その、俺に仕事をくれないよくわからない奴」

そう言っつて、ニセクロは席を立った。それに続き、コガネも席を立ち、美少女が居るドアの方へ向かった。

眠そうなマスターを置いて、コガネ、ニセクロ、謎の美少女は店を出た。

勇者 side 2

勇者であるフウセンは、獣を斬っていた。

「ここは獣が多いですね。少し疲労がたまりそうです」

フウセンは、数えるのも面倒になったほどの獣を斬り倒しながら、言った。

「疲労回復使う？まだ、疲労回復の瓶はたくさんあるし」

アカネは、魔法起動用の瓶を持っていた。魔法を使える瓶。便利なものだ。と思うが、意外と精製は楽ではない。そんなものは使うものにとっては些細なことではないのだが。

「まだ大丈夫です。なんで、瓶に魔法が貯められるんですかね？」

フウセンは疑問になったことをつぶやいた。所詮興味。これほど意味の無いことはない。そんなことをつぶやいている時にも、周りの獣はフウセンが斬り裂いている。王様から貰った大剣。斬れ味は悪くないようだ。

「そんなことを考えてもしようがないよー。魔法の起源を勉強したところで魔法が上手くなるわけじゃないんだからね」

アカネはつぶやきに反応する。反応している間にも家宝の短剣を使い、獣を、フウセンほどの速度ではないが、斬り倒している。

「それもそうですね、っと」

勉強するのは悪いことではないし、新しい発見があるかとも思っているが、勇者は同意する。

悩んだところで、少し隙ができ、それにつけこもうと獣がフウセンに噛み付いた。

「この獣もうざったいですね。町の被害も考えたら、倒さないわけにもいきませんけど」

フウセンが不満を漏らす。だが、勇者にあったほうがいいはずの

正義感はしっかりと持っているらしい。

「向こうから敵襲…獣型……ここにいる獣と同一種……」

話に混じらずに。淡々とサポートをしながら、獣を市販の弓で撃っていたソラが報告をする。

「まじですか……ここにいるのだけでも辛いですし、どうしますか

……」

フウセンが、少し悩むような素振りを見せる。斬れ味がいい大剣を持っているとはいえ、獣に数で押されたら厳しいようだ。それを見たアカネが、剣で斬るのは、限界だと悟ったように、

「まあ、倒しちゃえばいいんじゃない？ フウセンだって、魔法使えないわけじゃないでしょ？」

と、言った。

「それもそうですね。光の瓶は貯蓄が楽ですし、使っちゃいますか」
楽天なアカネの提案を、フウセンは、承諾した。

「まあ、瓶に魔法の呪文を言うのはだるいですね、『天なる恵みを持つ光よ、我ら人の子の助けとなり、邪なる者を討ち滅ぼせ！』」

フウセンが詠唱をすると、獣が全て、焼け焦げていた。

「お、全滅ですか、運がいいですね。さて、獣も倒したことですし、次の町に向かいますか、その町の近くに、魔王城の鍵が隠された洞窟があるらしいですね」

「全面的に同意—というか、さっさと魔王倒して、討伐後勇者パーティーライフを送りたいね—」

「右に同じ……前半部分は……次の町で、弓矢は補給したい。魔法の瓶は、時間がかかるから、とりあえず、補給はなしで行きたい……」

……」

「じゃあ、ソラの意見を採用しましょうか。次の町で、最低限の弓矢と薬草、武器の手入れを軽目にやっておきましょう」

そうして、フウセンたちは歩き出す。コガネとニセクロがいる方向へ。

忍者 side 3

コガネとニセクロと美少女は依頼の確認を始めようとしていた。店から出て、宿屋の大衆室と呼ばれる場所の喧騒の中、二人の相談は始まった。

「というか、名前はなんなんだ？ 話すにしても、知らないと不便だろ。教えてくれ」

コガネは美少女に質問をした。依頼の確認、受諾、拒否、なにをするにも、必要な要素かもしれない名前を聞いた。まあ、このまま美少女さんで進めても問題ないのかもしれないが。

「僕の名前ですね。えっと、ミドリです」

依頼しに来た美少女改め、ミドリは、名前を答えた。名前にちなんで緑色の服を着ているのだろうか。というか、ここは日本ではないという細かいことは気にしてはダメだ。絶対。

「というか、俺は、帰っていいんだよな、帰るぞ、帰らせていただくぞ！じゃあな、コガネ」

ニセクロは帰った。何処かへ。投げやりな雰囲気で、その大衆室を後にした。コガネやミドリからすれば、なぜついてきたのかの方が疑問だ。

「えっと、とりあえず、どんな依頼なの？ それを聞かないと、俺も受けていい依頼なのか、受けないほうがいいのかが判断できないんだけど」

「依頼の内容は、この町の近くにある『鍵の在処』という遺跡型ダンジョンに潜って、その最深層にある鍵をとって欲しいんですよ。コガネさんだけだと、辛いレベルのダンジョンだと思うので、僕も付いていこうと思います」

「ダンジョンに出る敵の平均レベル、君の使える魔法、戦闘特技を教えて欲しい。俺が使える魔法は、隠蔽系、武器強化系。他にもあるけれど、それは機密事項。戦闘特技も機密事項で頼みたい」

「まあ、大体は情報屋に調べてもらっているんで、わかりますが、触れないでおきますね。ダンジョンにいる敵のレベルはゴブリンレベルと、バットレベル。ただし高めの頻度で、上位種が出るらしいですね。僕の魔法は、疲労回復、体力回復が地脈からの流用魔法で使えます。それと、炎系魔法が瓶抽出魔法で使えます。戦闘特技は伏せさせていたきたいです」

「地脈流用魔法とは、レアな魔法を持っているね。上位種次第だけど、二人入ればいけそうだ。とりあえず、ダンジョンまでの地図とあればダンジョン内部の地図を頼む」

「わかりました……」

こうして、依頼は受けられていく。人々が交差しているのも知らずに、世界は廻る。

こうして、忍者と依頼者たちの物語は明日へ繋がる。

勇者 side 3

フウセン達の一行は、コガネやニセクロがいた町に着いた。何かのめぐり合わせなのか、ただの偶然なのかは誰にもわからない。

「少し活気が少なめな町ですね。荒くれ者が少なそうな印象があります」

自分たちの影響でそうなったとも知らずに、フウセンは呟いた。仕事がないときは、酒を飲む頻度も少なくなる。荒くれ者は、静かに飛び立つ時を待っているのだろう。

「それもそうだねー国の中心部から外れるほど、活気が少なめな印象があるねー」

的はずれなことを、アカネは言う。これをニセクロなどが聞いたら、躍起になって反論をしてくるだろう。

「というか、私たちの旅が長くなるほど、活気は減っている?」

「まさかそんなことはないでしょう。人助けもかなりしていますし、僕たちが通った町は、活気が出ていると思いますけどね」

そのまさかだと知らず、フウセンは軽はずみなことを言う。

「というか、明日も早いしねー早めに宿屋にいった方がよくない?」

「同意……」

アカネの提案を、ソラが同意する。

「それもそうですね。ですが、明日はいつもより遅めにしましょう。初めて遺跡型のダンジョンですけど、遅めに出ても問題はないはずです」

「なんで?」「本当に大丈夫?」

二人が疑問の声を上げた。同時に、街の商店街に入った。

「明日は、今日の疲れをゆつくりととってから、この商店街で物資補給をしてから行きましょう。いくら急いでも、入ってしまった中は暗いので、早く行く必要はないと思います。それなら、ゆつくりしていきましょう」

「なるほどねー」

「了解した……」

フウセンの提案を、ソラとアカネは同意する。何も問題はないだろう。眠る時間が遅くなるのはいつものことだ。

こうして、勇者たちは商店街にある宿屋に入った。大衆用の酒場から、話し合ってる声が聞こえる。

「夜分遅いの、人がいますね」

軽く世間話をするようにフウセンが言う。

「そうだねー」「同意……」

と、二人が肯定的なことを言う。そしてアカネが、

「状況も聞きたいけど、眠いし、早く寝ようよー 明日遅いつていても、物買ってから行くんだから、結構早起きしないでしょ?」「そうですね」

と、フウセンが同意して、宿屋の手続きを始めた。そうして部屋に入り、三人は眠りについた。
こうして、勇者たちも明日へ繋がった……

魔王 side 1

厳粛な雰囲気とは程遠い、喧騒と、飯の臭いに包まれた魔王城の一室。人間から見ればゲテモノで本当に食えるのか？ という食べ物まで並んでいる。そこで。魔王は対勇者会議を開いていた。名目上は会議なので、酒は禁止されている。酒を飲むと暴れだすものが後を絶たないからだ。そして、その場所の頂点にいたのは……先刻コガネと話していたニセクロだった。

たどり着くのが早すぎると思っただろう。だが、この世界には、魔法という便利なものがある。

「魔王様、魔王城にいる時に、人間への擬態はおやめください」

側近、だろうか？ 気が強そうだが、整った女の顔の魔物。その人が、ニセクロに提言した。

「チツ、わかったよ」

お前だって、人間の顔をしているだろうに、と、一瞬思ったが、それは自分が命じていることだった。ボケが始まったかなーと、軽く考えながら、魔王は自分の顔を変える魔法を使い始める。

ニセクロと言いつかれた顔が、少しずつ、段々と、謎の造形になる。世間一般に魔王と評される顔になる。

「それで、勇者の動向はどうなんだ？ 畏にはかかりそうか？」

魔王が質問する。魔王は人間の街に視察に出ていたので、勇者の視察は部下に任せていたらしい。

「私の視察部隊が、獣の人海戦術で情報集めと疲労蓄積の準備をやっておいたわ。現在勇者パーティーは、ダンジョン『鍵の在処』に近辺する町『国の外れ』に到着したわ。ゴブリンの配置も終わっている」

先程提言した人が、ニセクロに言った。勇者視察の部隊を任されていたのは、この女性のようだ。

「おう、シース。ありがとう。ということで、お前ら！ 明日勇者向けの大型魔物を配置しようと思う。配置は、以前決めたとおりだ。この遠征で、勇者を倒せば、魔王軍には、数年以上の安泰な日々が戻ってくる。多少の犠牲はできるかもしれない。だが、魔王軍の未来のため、耐えて欲しい！」

魔王の勇者を倒す演説を最後に、魔王軍の短い会議は終わった。報告と、前日の気合を入れただけで、会議とは言えない代物は終わった。その後、明日仕事がない魔物は肉と酒に溺れ、仕事という名の殺しをする魔物は、早めに部屋に帰る。早めに寝たほうが、殺しの効率は上がる。単純な考えだけではない、魔王軍であった。そうして、ニセクロやシースも、床についた。残念ながら別の寝室だ。

魔王たちも、明日へつながることになった。
これで、勇者、忍者、魔王は明日という日に、足を踏み入れることとなる……

勇者 side 4 魔王 side 2

勇者 side 4

フウセンは『鍵の在処』の入口に立った。薄暗い洞窟には、湿気がこもっている気がした。

「これが、魔王城に入る鍵があると言われる『鍵の在処』ですか……大事なものを守っていきそうな厳格な雰囲気がありますね」

「私には、しめぼったくて、薄暗いだけのダンジョンにしか見えなわけだなー　なんか、オーラとかあるもんなのかねー」

「アカネ……雰囲気をぶち壊すようなことを言わないほうがいい……常識的に考えて……」

フウセンが多少ふざける。いまから血と肉を引き裂くのだ。慣れているとはいえ、軽口でも言わないとやってられない。

「そんな常識はどこにもないよー？　少なくとも私の中にはないねー」

軽快な話をしながら、フウセンたちは、遺跡に入っていった。ザツ、と、地面をこする音がする。

「というか本当に薄暗いねー　結構怖いやー」

暗い中、アカネはモンスターや獣が襲わないかと不安になっていくようだ。

「おっと、松明を出すのを忘れていましたね」

「それって結構重要じゃない？」

「フウセンって意外と天然……？」

馬鹿にするように二人が言う。

仲間二人に罵倒されながら、フウセンは松明に火をつける。

「二人ともひどいですね。まだ歩いて数分じゃないですか……別に数分くらい暗い遺跡の雰囲気を楽しませてくださいよ……」

松明を火につけたかわりに、不平不満が消えるということはないようだ。

「だって、暗いのは嫌だしねー モンスターとか怖いじゃんか？」

「アカネに同意…… 全面的にフウセンが悪い……」

「！???」

フウセンの前に、人影が見えた気がした。フウセンはそれに火を近づける…

「アカネ！ ソラ！ ゴブリンです！ 戦闘準備！」

見たものはゴブリンだった。数は一匹。群れで行動するゴブリンにしては、珍しい。フウセンたちも一瞬疑問に思ったが、そんな些細なことは関係ない、と自らの思考を切り伏せた。

「了解！ とりあえず、光魔法で、視界明るくするね！」

アカネが光魔法を使うための瓶を出す。フウセンは松明を消し、剣を鞘から抜く。ソラは回復魔法用の瓶を準備し、背中 of 弓を構える。

「天なる恵みの光よ、大地なる我らの知識と融合し、我らの助けとなれ！」

アカネが光魔法を使う。視界が明るくなる。

「ッ!？」

前衛に居たフウセンがゴブリンの棍棒の一撃を食らう。

「結構痛いですね……」

「撃つ……」

シュツという音と共に、ソラの矢が宙を舞い、ゴブリンに命中する。ゴブリンは悲鳴をあげ、一步退く。

ゴブリンが退いていた時、フウセンの剣がゴブリンに命中する。

ゴブリンは、手に持っていた棍棒で防ごうとするが、間に合わない。ザシュツという音と共に、ゴブリンが地面に倒れる。

「ふう、疲れましたね」

フウセンがため息をつく。ソラは弓を下 of 位置に戻し、アカネは攻撃魔法の瓶を、バッグに戻す。

フウセンが松明を付け直そうとした頃、異変に気づく。
「皆さん……非常に言いにくいのですが……敵、また来ましたね」
続々と出てくるゴブリンを切り倒しながら、勇者たちのダンジョン攻略は続く。

魔王 side 2

その頃、魔王であるニセクロは、ダンジョンの最深部にいた。そこには、異形の怪物。鋼鉄の体という表現にふさわしい。というか、鉄そのものの怪物だ。

「頑張ってくれよ、お前は役割的には足止めだが、勇者を倒せる力も持っている。その気になれば、勇者だって、倒せるんだから」
「ギャー。ギャオー」

人間にはわからない声で、魔物は頷く。ちなみに『分かったでガンス！ 俺様が勇者ごとき、ケチヨンケチヨンにするガンス！』って言っているらしい。わからないものだ。

「と言っても、お前の本分は、あくまで、勇者の疲労を溜めることだ。それを忘れては困る」

「ギャオ。ギャオ！ ギャアオオオオ！」

魔王の激励に、魔物は頷く。正確にはわからないが、しっかり勇者を倒して欲しいと魔王に言ったらしい。さっきの翻訳は想像だ。

「じゃあ、俺は勇者の視察と、アカマムシにでも、挨拶してくるわ。頑張れよ、ギンマムシ。」

ギンマムシと呼ばれた魔物は頷いた。

ギンマムシと別れ、ニセクロはダンジョンを歩いていた。

「昔は家の庭のように、ここを歩いたな……」

ニセクロは寂しげに呟く。ニセクロにとっての庭は、勇者にとつての通過点であり、忍者にとつての、金づるだった。

「なんで、ここで殺し合いが始まるんだろうな」

罫を仕掛け、勇者を嵌めようとしているのは自分自身とその仲間

たちなのだが、それを棚に上げ、呟く。人に聞かれていないのだから、問題はないのだろう。

「みんなのために、何より、シースのために、外敵は滅ぼさないと……」

誰も聞いていないと思い、魔王は呟く。シースが偵察部隊を率いており、なおかつ、魔王がいるダンジョンは、シースの管轄下なのは解っているのか、判っていないのか、それとも分かっているのか。「なんで、俺の世代に勇者なんて出たんだよ……魔物は確かに人間を敵とする。だが、友愛派の奴もいるし、俺だって友愛よりだよ……なんで、人間は魔物全体を敵にするんだよ……」

覆すことができない、運命に呟く。人間共が俺らに歯向かわなければ、俺たちもやり返すことはないのにな、と、続ける。

「出口か……勇者には会わなかったな」

魔王はそこで見た。コガネと、半分程度忘れていた美少女……ミドリを……

忍者 side 4 勇者 side 5

忍者 side 4

コガネとミドリは、ダンジョンにいた。ここまでの道中はコガネにとって大変だったようだ。ミドリがコガネのことをよく聞くのだ。忍者関連はばかして伝えたが、なぜかミドリは、幼少期に付いて聞くことはなかった。

「やつとついたな……」

少々疲れたような様子で、コガネは言った。ため息まじりな一声だった。

「まあ、本番はこれからだけだね……」

「まあ、そうだな。というか、足跡？」

コガネは足元に足跡を見つけた。三人分？ いや、逆方向に一人三人入って、ひとり帰ってきた？ いや、靴の感じが違う？ 別の出口？

いろいろな思想が思い浮かぶ。

「変な足跡だな。三人入って一人でてるが、その足跡は全て違う……」

…なるほどな……」

「何かなるほどなの？」

「いや、別の出口があるのかなって思っ」

「そんなの誰でも考えると思っわ。僕でも考えるし」

「本当？」

「嘘」

漫才にも到達しないやりとりが繰り返された。ミドリはミドリで、何か考えているようだ。

「とりあえず、この足跡の調査をやってから行くという慎重論と、無視して特攻するという、軽率な感じがする案の二つがあるけど」

「僕の考えを言わせてもらうと、この足跡をたどって行くというのが、一般的だと思います。この足跡の人が、一つ目の曲がり角の先で死んでいない限り、先にいる魔物は倒されていると考えていいでしょう。なおかつ、罾等も解除されている可能性が高いですね」
「なるほど。それで、この外へ出ている足跡はどうする？」

「続いている先が違うようだし、こっちは敵に待ち伏せされている可能性が高いと思います。それに、上位種の魔物が、この人を追っている可能性もあります。その場合も、引き返した可能性も高いので、この道は危険だと思います」

「じゃあ、この道を進もうか」

「そうですね」

二人は少し歩いた先に、ビンを見つけた。正確には瓶の割れ後。その横には、

ゴブリンの死体。

何度かは見たことがあるとはいえ、獣より、人に近い形状の死体を見て、コガネは、息をのんだ。

「ひどい光景だね」

コガネの一言が漏れる。ミドリはモンスターの死体に感想を漏らす冒険者を見て、

「軟弱な冒険者もいるんですね」

と言った。

「ハハハ、軟弱はひどいдар。まあ、何度見ても、人に近い獣人の姿にはなれないがな」

勇者よりも人間らしい忍者は、獣人に同情しているようだ。

「いくら人間ではなく魔物とはいえ、死体を見たときに、悲しさを表すことは生物として必要だと思う。だけど、俺は人間として倒した奴を卑下することはできない。襲ってくる獣人は倒さないとしたし、自分の目的と他人、他種族の命を天秤にかけないといけない時は、いくらでも来るよ」

そう言いながら、コガネは小刀を構える。

「優しいのですか、冷酷なのですか、よくわからない人ですね」
「まあ、見るのは嫌だけど、利用するには厭われないってことだよ」
そうして、コガネはゴブリンに残されたスカーフを盗る。いや、取る。それを分けるときは、永遠に來ない、言葉の選択。

「さて、先に行きますか。先に來た方々も、まだ見えないしね」
「そうですね。」

二人は、歩きだした。

勇者 sides

フウセンは、剣を振るっていた。辺りを埋め尽くすゴブリンに向かつて。

「どんだけいるんですかつ……!？」

言葉を発する間にも、剣は止まらず、振るわれる。

「私にもっ、わからないっ！」

魔法を使う隙が見つけれられないのか、アカネも細剣を刺し続けている。

「とりあえず……逃走か、戦略的撤退か、逃げるボタンを選択するか、我々は決めないといけない……」

弓が使える間がないのか、ソラは瓶を投げる。魔法の瓶亜種、榴弾だ。弱気になっても、数は減らすつもりらしい。

「逃げるわけじゃないじゃないですか！ 進みつ、ますよ！」

爆撃の音を背景に、フウセンは大剣を振るう。

「少しは、掃けてきたところです！ このまま押し切るしかないでしょう！」

「見えたよ！ 簡易型光魔法だ！」

アカネが、瓶を出す。

「我らの光よ、敵を怯ませ！」

フウセンとソラ、それに術を行使した者は目を瞑る。

当たりのゴブリン。数十匹いたはずが、今では数匹になったゴブ

リンは、目を晦ます。

「今です！」

勇者の剣、魔法使いの細剣に、手榴弾が辺りの獣人を薙ぎ倒す。その後、最低限の、戦場処理をし、ゴブリンから、貴重品らしき物を剥ぎ取った。

「先に…行かないと……まだ、鍵は見つけてないから……」

ソラが、疲労した声を出す。血の臭いと、肉の断面、赤く輝いた二人の剣を見て、吐き出しそうになった。

「またこんな数を出されたら、帰れるかもわかりませんね」

フウセンが弱気になる。翳った光を放つ剣。赤と光の対比が、王に貰った剣に翳りを与えている。

「まださー終わったわけじゃないんだがら、先にいこうよ。鍵の前に、敵が出ないこともありえるっしょ？ 次の小部屋か、一旦戻って、ひとつ前の小部屋で休憩をとってから、鍵を探そうよ」

返り血を拭き、細剣を鞘に収める。

「休憩では、疲労回復呪文をメインに撃つからさ」

フウセンは、アカネを尊敬した。この状況で、弱音の一言も無いなど、波の精神力では出来まい。

「わかりました。一つ先の部屋は危険かもしれないですし、ひとつ前の部屋に戻りましょう」

血を拭くのに時間がかかったらしく、ようやく大剣は鞘に収まった。ジャキッという音と共に、戦闘の雰囲気は消え去った。

「とりあえず……手榴弾はすぐ減った……」

ソラは、戦闘で減ったアイテム類の確認をしていたようだ。

「疲労回復の瓶をあまり持ってこなかったから、数が厳しいかも……フィールドワークの方が疲れるという予想が、外れた……」

道が整備されているダンジョンの方が疲れなと思ったらしい。ビンの数は、体力回復、補助、攻撃、疲労回復、妨害の順で、瓶を持ってきたようだ。

「どうしますか。全部疲労回復の瓶を使ってしまうのも躊躇われま

すね」

「でも使わないと仕方ないと思うなー？　というか、そろそろ一旦前の小部屋に戻らない？　疲れたし。」

二人とも同意して、前の小部屋に戻り出した。そのとき、ある魔物が、次の部屋に行ったなら、確実に倒せたのよね。と人間にはわからない言葉で呟いたことを、勇者たちが知る由は無かった……

魔王 side 3 忍者 side 5

魔王 side 3

ニセクロは逃げていた。追われていないが、逃げていた。

「危なかったな……」というか、なんでコガネたちがここにいるんだよ……」

魔物と勇者の決着の場に、親しいものを巻き込みたくないのだから。見つけた瞬間、隠密魔法を使い、逃げた。

「あのミドリって奴のせいなのか……？ というか、アカマムシも探さないとな……逃げてきたから場所が分からん」

適当ぶりに磨きをかけ、歩き出す。

「方角どっちだっけかなー？ というか、ここどこかなー？ わからないかしらー」

暇だったのだろう。誰とも取れない人間？ いや、人形の声まねをする。

「道に迷っちゃったかしらー場所が分からないかしらー」

傍で聞いている人？ 魔物？ がいたら気持ち悪いと感じる高い声で、声まねをする。

「何をやっているの？」

「ギヤアアああああああアアアあつアツアアアア」

厨二時代の黒歴史を大学時代になってから覗かれた、不幸な人のように、叫んだ。いや、叫ばずにはいれなかった。というか、反射的な？

「なんでシースがここにいるんだよおおおおおおおおお！」
叫んだ。

「え？ 魔王様が困っている様子でしたので、急ぎ駆けつけたんです。具体的に言うと。卵好きな、第二番目の、鳥の名前と同じ人形

の声まねをし始めたところあたりからかしらね。ものすごくいいんだですよ。」

完全におちよくられにこられたことを悟ったのか、死んだような目を魔王は見せる。

「まあ、後半は冗談だとして、迷ったなら、道案内してあげるわよ、魔王様？」

「昔の呼び方に戻せないのか？」

「もう年的に無理だわね。年齢分かって言ってるんですか？　魔王様？」

嘘だ。嘘だ。俺が二十歳いや、魔王即位式…十八の時から…それから呼ばれ方は魔王様だ。ここ十年、いや、十五年以上。魔王様という呼ばれ方だ。

「まあ、魔王様は、魔王様なんだから、威厳を……」

「わかった。早く案内してくれ」

ニセクロは、話を中断させ、先を急かした。これ以上言わせたくないらしい。

「わかったわ」

シースの雰囲気が変わる。幼馴染と接する態度から、魔王に使える魔物の態度に。

「では、魔王様、こちらでございます。この先に、仲間であるエイグレトの配下である、アカマムシがおります」

「というか、よく道がわかるな」

「私めは、配下との交信魔法が得意ですので。そのおかげで、広報情報集収部隊の隊長を務めさせていただいております」

「日毎から、ありがとうな。お前のおかげで、魔王軍は成り立っていると言っても、過言ではない。今回の勇者討伐作戦も、お前とエイグレトの考案だったな。近辺の日時に、褒美をつかわそうと思う」

「ありがたき幸せでございます。魔王様」

歩きながら、二人は話す。事務的な会話でも、魔王は不安で、配下は期待。が入り乱れる。ただ、両方の願いは……

少し時が経ち、アカママシを見つけた。ギンママシと違い、知能が微妙に高いので、人語も話せるらしい。

「これはこれは魔王様、私などがお会いでき、非常に光栄でございます。話は変わりますが、少しお見えになるのが、遅かったですね。何か問題でも起きたのですか？」

ニセクロはアカママシに言われて気づいた。そういえば、シースにコガネたちのことを話してないと。まあそれでもいいかいかと、瞬時に思い、

「ああ、少しな。俺の人間の友人が見つかったんだよ。遺跡付近でな」

シースが驚く。昔は、私にくつついていただけなのに、今は友達を作れるレベルにコミュ力が上がって……みたいなことを。

「どうするんですか？ 計画に支障が出るかもしれないわね」

軽く、日常的な声に戻り、コミュ力上がった魔王に言う。

「まあ、多分大丈夫だろ。あいつらのレベルで、到達できるダンジョンだが、勇者の方がひと足もふた足も早く入ってたし、なんなら勇者を倒してくれるかもな」

そう言いながら、アカママシに、コガネの特徴を教え、こいつは攻撃するなと釘を刺す。

「じゃあ、アカママシ、お前は、ここに出てきた、勇者たちに圧倒的な攻撃力で止めを刺してくれ。ギンママシとゴブリンの波作戦で、勇者の疲労は溜まっているはずだ」

「わかりました。全力を尽くします」

アカママシはそう言い、所定の位置についた。

「よし、シース、オレらもここらで見張ってるか。アカママシと、ギンママシの保険をかけておいても悪くはあるまい」

「そうだねえ。まあ、不確定因子もいることだし、保険があってもいいんじゃない？」

完全に魔王と配下という立場は忘れていたらしいかった。

コガネとミドリは、迷っていた。足跡をおうつもりが、戦闘現場は、血で足跡は消え、さらにいろいろな部屋からの足跡と混ざったらしく、完全に足跡は消えた。

「足跡がないというか、ゴブリンだけいるんだよ……」

コガネは絶句する。部屋から部屋から部屋から、ゴブリンの足跡はあった。

「この数は異常ですね。まるで以前から来客があるのがわかって、畏にはめたような感じですね。」

的確すぎる意見を言う。勘がいいのだろうか。

「数十匹単位でいそうだな。こんな数に襲われた先客に合掌。」
手をあわせるコガネ。

ザッ、と物音がした。足と床の摩擦音……

「チツ、敵かよ!？」

コガネが懐から刀。短剣より短く、普遍的な刀よりは短い刀。所謂忍者刀を出す。

「まあ、雑魚だし、暗器は使わなくていいか……」

ひとりごとのように、いや、独り言をコガネは呟く。

コガネの言葉を聞いてか聞かずか、ミドリも武器を構える。杖の上方である木の部分を取り、なかから片刃が出てくる。

「珍しい武器だな。」

「まあ。」

軽く会話を交わしてから、コガネは少し先に居たモンスターに向かい、忍者刀を振るう。空気を裂く音に遅れ、肉を裂いた音。

「これは僕が武器を用意する必要はなかったかもですね。」

刀を切り終わったあと、上に向かい切返す。名前も知らぬモンスターは数刻で命を絶たれた。

「案外弱かったな……もう少し強くてもいいだろう。」

「まあ、上位種じゃないただのゴブリンですからね。なんで僕武器出したんだろ。」

コガネは刀をしまい、ゴブリンと分かった魔物の所持品を漁りだす。「というか、なんでこいつだけここにいるんだよ…ほかの魔物と合流すりゃーいいのに。」

「まあ、一匹くらい迷ったゴブリンがいたんでしよう。偶然会ったのは。リアルラックの低さじゃないでしょうか？」

「なんか、微妙にわかる人とわからない人が居そうな言葉を使うんだよ…」

「メタるのとどっちが重罪でしょうかね？」

所詮どっちも変わらなそうなことを二人は言い合う。

「というか、地図はどこやった。冷静に考えれば、それがあれば迷わないはずだろ。」

「多分、偽物売りつけられましたね。」

「マジかよ…」

偽物の地図を出した。

「ほら、見てください。どう見ても偽物でしょう？」

「というか、この部屋配置。暗号で偽物ってなっているぞ。売ってる業者の人は地味に親切だな。」

「まじですかー」

その地図は忍者暗号が使われていた。というか、わかる奴少ないと思うが、作ったやつはなんで日本以外でこんな地図作れたんだよ的なことをコガネは考え、

「でも、解読できる奴は少ないだろ。結構専門的な暗号だぞ。」

「売っている人は、地図じゃなくて、土産として売り出してたのか…」

ミドリは軽く落胆した。そうして、二人は先に進んだ。

勇者 side 6 忍者 side 6

勇者 side 6

勇者たちの休憩は終わった。

「そろそろ先に進みましょうか。鍵を探す時間は少しでも欲しいですしね。疲労回復の瓶はあと数本になりましたが、疲労は割と回復できましたし」

フウセンは立ち上がった。それにつられ、周りの面子も立ち上がる。

「同意する……のんびりしすぎて、鍵に時間かかれなくなったら本末転倒」

最後にという気持ちで、水筒にいれた砂糖などをいろいろ入れた水。現代でいうスポーツドリンク的なモノをソラは口に含む。緊張の糸を張り直す。

「了解だよー」

アカネは剣の位置、瓶の位置、補助道具の位置を確かめる。冒険するものにとって、アイテム類は生命線だ。

「さて、行きましようか」

勇者たちは歩きだした。先程引き返した部屋に向かって。

勇者たちは、先程ゴブリンと戦った部屋についた。

「うわっ……血なまぐさいな……」

「これは、ひどいですね。自分たちでやったとはいえ、この部屋には近づきたくないですね」

フウセンは下、床を見ながら言う。

「オカルト的なことを考えそう……早く次の部屋に行こう……」

ソラもこの部屋には耐えられないようだ。獣臭い獣人の臭いに、

それから出ている、血。瓶のなかに入ってた液体も、いい臭いとは言い難く、この三重奏の臭いが鼻を刺激する。

「今後三週間は鉄分はやめときたいですね……」

そうして、次の部屋へ行った。

勇者たちは新たな部屋……その前の扉を見つけた。

「この部屋は……ほかの部屋より豪華な扉ですね。扉が無い部屋も多々あったというのに、ここまで豪華な扉があると——武器を構えなくなりますね……」

フウセンが狂戦士じみた声色を出す。鞘に収まった大剣をだし、瓶を出しやすいところに設置する。

「興奮しすぎだよーフウセン。もつとゆっくりとしないかねーでも、戦闘体制を整えなくなる気持ちはわかるねー」

細剣を構え、瓶を数個装着する。

「さて、開けよう……」

既に手榴弾と瓶を手の届きやすいところにバッグから出したソラが、豪華絢爛な装飾を施された扉を開けた——」

忍者 side 6

「なんだ……このビンの量は……」

コガネは絶句した。

「きつめのダンジョンなら普通だと思いますけどね。僕が持っている瓶の三分の一くらいですかね？」

ミドリが魔法使用的な観点で解説を入れる。その中、コガネが瓶を手にとった。

「疲労回復系か……」

「魔法使用的な観点から言うと、結構安全重視のパーティーの場合、これくらいの量を持ちますね。カバンは、三人で分担でしょうね」

コガネが瓶に入っている液体の臭いが辛いと思い始めた。瓶は液

体、薬草などの物質、地脈から作られる魔法から作られる場合が多く、薬草などの物質はキツイ臭いを放つ場合も多い。

「そろそろ行きましようか。ここで瓶を見つけても仕方ないですし」

「そうだな。そろそろ次の部屋に行ってもいいだろう」

次の部屋にコガネたちが入って最初にもった感想、それは、

地獄

だった。

「これはひどいな」

血、獣、液体、臭いの三重奏。

「そうですね。軽く火薬の臭いもするので、手榴弾も使われてる気がしますね」

「どんだけ、激しい戦闘だよ……死体も横に積み上げられてるし」

「戦利品の剥ぎ取りも途中で終わってますね。実際、ゴブリンの戦利品ばかり手に入れても、あまり金になりませんけど」

「まあ、少しもらってか。一晩の酒代くらいにはなるだろ」

「僕は、この臭いの中、作業したくないですけどね」

「臭い位気にしたら負けだ。臭いなんて気にせず、酒だ酒だ」

「というか、さっきの獣人に同情する姿はどこへ？」

「こんな臭いを発する奴に同情することができるか？俺は無理だ」

「現金ですねえ」

死体の剣と衣服を次々と剥ぎ取る。

数分後――

「こんなもんだろ。取りすぎて臭いが写っても嫌だしな」

「現金ですねえ」

そばに離れていたミドリが呟く。

「まあ、死んだ奴は道具を使えないから、俺は有効利用しているんだよ。何もやっていなかたお前よりはましだろう？」

「僕は、回復魔法の亜種で消臭をしてたんですよ。あなたのために」

「気付かなかつたぜ……」

「地脈から抽出できる割合も大きいですし、便利なんですよ」

「魔法を使えない俺には関係ないがな」

「魔法なんて、誰でも勉強すれば使えるのに……」

「才能で使えるか使えないかが決まる地脈抽出魔法を使えるお前にだけは言われたくないな」

「僕以外にも、地脈抽出魔法が使える人は結構な数いますし、地脈主義者みたいな活動してないので、大丈夫だと思いますけどね」

「地脈を叩く、瓶主義者も、瓶派に威圧的になる地脈主義者も魔法使えないものからすれば、ウザイだけなんだけどな」

「というか、剥ぎ取りがおわったのなら、先に行きませんか？ 早く鍵見つけて帰りたいですし」

「そうだな。そうするか……」

その先には——空いている扉があった。

ラストエピソード

フウセンたちが部屋にはいり、はじめに見たものは……鉄、だっ
た。

「あれはなんなんですか……？」

「あれはなんなんだよー？」

「理解……不能……」

ものすごく大きな鉄が、大きめの部屋の中心付近に存在。それならばまだ許容範囲だろう。動かなければ……

「気持ちワル！？　なにあれ、なんで、鉄がニヨロニヨロと動いて
いるんだよ！？」

アカネは虫が苦手らしい。鉄でも二ヨロ二ヨロ動いていれば、虫っぽくて気持ち悪いのであろう。

「理解……不能……」

「二人とも、驚いていないで戦いましょうよ！」

フウセンが、大剣をもち、走り出す。後ろに宝箱が見えた。

「**といつても、虫は無理！ 無理！**」

アカネが逆方向へ走り……出した。

走り去るアカネをむしして、ソラは、鉄に向かい、炎魔法を、

「燃え盛る世界の理よ、我身に宿り、敵を殲滅せよ！」

撃つた。

鉄は、目が見えないのか、それがあたった瞬間、ソラの方向を向
き、頭部にあると思われる鉄をはがした。

「虫！？ 虫！？ なんで、鉄から虫が！！！？ 誰か！助けて！」

出てきたのは、緑色の物体だった。さらに付け足すと、芋虫の先頭部分にくっついてそうな。丸みを帯びた緑色だった。

「ちょっと、アカネ……取り乱しすぎ。」

ソラがセリフを言った瞬間、鉄から顔を出した芋虫が咆哮を放つ。
ギョオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

鉄に近づこうとしたフウセンが、弾き飛ばされた。

咆哮を聞いて、予想よりも強い敵だと察したアカネは、芋虫の方を向く。

「これはちよつとやばいね……」

アカネが、鞆から身体強化用の魔法を放てる瓶を出す。

「というか、炎の魔法が効いていない？」

先程の炎魔法を当てられた鉄を見ても、多少焦げたただけだった。予想以上に硬い敵だと思い、なんの魔法を使うか迷い始めた。

吹き飛ばされたフウセンは、起き上がる。

「どんな肺があれば、あんな声が出るんでしょうかね……」

いくら強い攻撃を放つ敵にも、剣士は立ち向かわなければならぬ。

また鉄をかぶった虫……ギンマムシが動き出す。転がっている剣士は無視して、後方支援のソラに向かう。

「させるかあああああああああ……！！！！！！！！」

勇者が叫び出す。ニヨロニヨロと動き出したギンマムシを大剣で止めようとする。

剣とギンマムシの頭の部分がぶつかる——と思いきや、ギンマムシが鉄を操る。尻尾、いや、尾？の部分にあった鉄、が剣とぶつかる。

意外に早い、尾の攻撃と、鉄がぶつかり、勇者は……吹き飛ばされた。

「くっ……」

「やばい！」

後方部隊に合流したアカネが、回復魔法を詠唱し始める。

「天なる恵みよ、我が仲間の癒しとなり、未来へ繋げ！」

回復し、意識が戻ったフウセンは、狙います。

（虫の部分さえ、虫の部分にさえ、剣が当たれば、行ける……）

フウセンは、頭を狙おうとする。それを察してか、ソラが牽制目的で、頭に魔法を放つ。

ギンmamシはそれを避け、
その瞬間。

フウセンの剣が頭に命中した。よけるため、頭を下げたところに当たった。

ギンmamシは後ろに仰け反る。そこへ、ソラが火の魔法を放つ。
ぎやがあああああああああああああああああああああああ

ギンmamシが悲鳴を放つ。その悲鳴で、フウセンが軽く倒れる。

（あいつの声は強いですね……立てません……）

数秒倒れてから、フウセンが立ち上がった。もう一度、剣を頭に当てようとするが、今度は尾に防がれる。

またソラが炎魔法を使う。だが、今度は鉄に防がれ、フウセンの剣も避ける。アカネは、後ろで回復を待つ意味はないと判断し、前に出る。

フウセンができるだけ、剣を当てようと頑張るが、鉄に弾かれる。弾かれる。弾かれる。弾かれる。

（すこし、刃こぼれしてきたか……）

フウセンが後ろにアカネが来たのを感じ取った。

「アカネ！ すこし、前で耐えてください！」

「了解！」

フウセンが下がり、剣を研ぎ始める。アカネが細剣を鉄と鉄の間に入れようと刺し始める。ソラは、炎魔法を撃つ。

ギンmamシが、尻尾をフウセンに狙う。

「堅き守りの魔術よ！我らを守れ！」

簡易版の防御魔術を、アカネが撃つ。

「ありがとうございます！」

フウセンは、剣を研ぎ終わり、前線に出る。

フウセンの剣で鉄の攻撃を止める。防ぐ。守る。アカネは、細剣で攻撃しながら、時々後方に下がり、回復を撃つ。ソラの炎魔法が、所々の鉄を焦がす。

戦闘は長期戦になっていた。

ギンマムシの尾が振り回される。フウセンが、なんとか受け止める。アカネの細剣が鉄と鉄の間に滑り込む。ギンマムシが仰け反る。ソラの炎魔法が頭にあたる。ギンマムシが怯む。

10分間の戦闘……その末。ギンマムシは倒れた。

最後には、鉄が5枚程剥がれ、虫の部分が半分以上露出していた。ギンマムシが倒れたとき……勇者たちも、

――倒れた

扉の向こう。コガネたちは見た。鉄。虫。人。箱。鉄は床に散り、虫は死に、人は倒れ、箱は存在していた。

「どうするか……」

コガネが小声で呟く。人の顔が見えない。気絶しているのか、ただ倒れているだけなのか、判断できない。

「行ってもいいと思いますけどね。僕的には、倒れてても勝てそうだし」

「いくら相手が疲れているとはいえ、3対2だ。部が悪い」

（即効性の麻痺針を撃つか……だが、手の内は、隠しておきたいし）

コガネは悩む。悩む。倒れているのが罠の可能性もないわけではない。悩む。

「なら、僕が行きましょう」

「は!？」

ミドリが走る。宙を。空を。気を。驚くべき速さで。

動き出した影があつた。3人倒れている人間の中で、唯一の男だ。フウセンだ。視認できる速さギリギリなミドリの動き。それに気づくフウセン。フウセンは走る。が、疲れているのか、動きが遅い。

ミドリが宝箱を開けようとする。コガネが駆けつける。動き出した奴がいるんだ。加勢しないと仕方がないだろう。ミドリは宝箱を開けようとする。開かない。鍵がかかっていたようだ。

フウセンが叫びながら走る。周りの奴を起こそうという魂胆か。

ソラとアカネが何かと気づく。宝箱にいる不審な影。気づく。

アカネとソラも走り出す。ミドリが鍵開けを始める。だが、フウセンが追いつく。コガネは気づかれないように、4人のあとを追う。フウセンの斬撃。斬られそうになるミドリはよける。

「なんの目的でここにいるんですか？」

フウセンは質問する。怖い顔に、睨みをきかせ。

「なんでだと思いますか？」

ミドリは微笑む。天使の微笑みではなく、小悪魔。それが一番しっくりくるような笑みだった。

ソラは詠唱を始めた。アカネは細剣を取り出した。コガネは麻痺針を、手に構え――

刺した。

「――！」

声にならない悲鳴。詠唱に集中していたソラは、倒れた。

「一人……か」

コガネがつぶやき、アカネと相對する。アカネが細剣を刺そうとするが、コガネがよける。そのままコガネが、懷から忍者刀を出す。「シャアアアア――！」

コガネがアカネに刀を切りつける。アカネはよける。よけたところから、細剣を刺そうとするが、コガネが軽くよけ、かすっただけだった。

「チッ」

アカネが舌打ちをする。気にせずコガネが刀を振るう。アカネが細剣で……

止めた。

否。折れた。細剣がまっぴたつに。カランカランと金属が床に転がる音がする。アカネが落ちた剣先を取り、取ろうとしたところをコガネが刀で斬り付ける。

「チッ」

さらに、アカネが舌打ちをする。よける。アカネが足を使い、蹴る。コガネが難なくよける。

「終わりか？」

コガネが最後通告の様な雰囲気で聞く。絶対的な勝者のオーラを纏いながら。

「チツ」

アカネが三回目の舌打ちをする。カバンから瓶を出す。

瞬間。

コガネが足を地から離し、刀を振るった。アカネは取った瓶を投げつけた。

「！？」

コガネが疑問の声をする。よけようとした。

瞬間。

瓶が弾け、閃光を發した。コガネがそれをまともに目に浴びる。

否。浴びた。コガネが目を閉じる。そして、アカネが新たな瓶を出し、詠唱を始めた。

「天からの恵みの光よ。我らの助けとなり、敵を討ち滅ぼせ。」

アカネの詠唱が……終わった。天から發した光は、コガネの体目掛け、向かってくる。そしてコガネは……倒れた。

「さて……フウセンの助けに行きましょうか。」

アカネはそう言い、フウセンとミドリが戦っている戦場に向かう。

ミドリは微笑み終わった。そして、短剣を抜いた。神速と評される速度で、フウセンに向かう。胸に……当てる。

否。

フウセンが大剣を使い防いだ。

「なかなかやりますね」

飄々とした様子で、ミドリが言う。

「そっちこそ」

フウセンが言う。敵意を込めて。世界の敵だと。敵意を込めて。

二人は向かい合い……走り出す。神速の速度と、闘気高き、勇者の走り。ミドリは短剣を持ち、フウセンは大剣を持ち、打ち合う。パシッ――

弾き飛ばされる音がした。弾き飛ばされた剣は……短い。短剣だった。

「チッ」

ミドリが舌打ちをする。勇者は大剣を振るう。

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

叫びながら、フウセンは剣を振るう。

「仕方ないですね。そろそろでしょう」

フウセンが剣を振るっているのを知っていても、気にせずに呟く。フウセンは今から死ぬのに、何を言っても変わらないじゃないか、と当然のことを考える。

――剣が当たる直ぐ前だった。コンマ単位で、剣が当たるところで、ミドリは剣をよけた。当たると考えていたフウセンは全重心を傾けていた剣に振るわれ、体制を崩す。

「え！？」

フウセンが疑問の声を上げる。それを見ず、ミドリは第二の剣――刀。特徴的な短めの刀。を取り出した。俗に言う忍者刀だ。

「晦君には、気づかれちゃったねー」

本人と言った人しか気づかない名前を呟く。体制を崩したフウセンが起き上がろうとする。剣を持ち。この瞬間に刺せば勝てただろう、ミドリはそんなことも気にせずに、向かい合う。

「早いですね。起き上がるのが」

「なんで、よけられたのが不思議で自信を失いそうです」

軽口を女忍者と勇者が交わす。

「もう少し、剣を振るう速度は早めたほうがいいですよ…… このようにね！」

言った瞬間、ミドリは走り出す。目にも止まらない速度で。だが、それに気づいたフウセンは防ぐように動き出す。フウセンは大剣を

持ち、吹き飛ばせるように構える。その細い腕からどう振るわれたのか疑問な程の速度で、ミドリは忍者刀をフウセンに振るう。

衝突すると思われた忍者刀と大剣が――
当たらなかった。

疑問に思ったのはフウセン。当てなかったのはミドリ。フウセンが謎の行動に一瞬ひるむ。その隙を突き、ミドリは忍者刀を振るった……

バギンツ！！！！

ガラスが割れた。

「フウセン！ 大丈夫！？」

アカネがフウセンの心配をする。

一瞬何が起こったかわからなかったフウセンだが、瞬時に理解をして、

「はい。大丈夫です！」

と言い。刺された――

「は！？」

疑問の声をあげたアカネに、声もあげれず、倒れるフウセン。その前に立つのは……コガネだった。

「ちゃんと殺したかは確かめないとダメだぜ」

キザな雰囲気を纏わせ、コガネは言う。

「なんで！？ 私の魔法が、破られたの！？」

光魔法に関しては、絶対の自信を持っていた、アカネが悲鳴を上げる。

「破ってないぜ。耐えただけ」

なんでもないようにコガネが言う。

「あとさ、戦場では後ろに注意しろよ？」

そうコガネは続け、

「え？」

と疑問の声をあげたアカネが……刺された。

「注意不足だよ。戦場的に考えて」

ミドリが言う。地面に音を立てながら、アカネは倒れた。

「というか、こいつら強いのに戦い方がお粗末だよな」

「そんなこと言ったら、足元救われますよ？そろそろ麻痺毒も治ってきたでしょう」

そう言いながら、ミドリがソラの方を向く。確かにソラは少し動き始めてた。

「おっと。忘れてた」

そう言いながら、コガネがミドリと同等かそれ以上の速度で走る。

一筋の刀。コガネの刀がソラを刺した。

「まあ、とりあえず……殺すのもなんだし、麻痺毒でも与えて、鍵盗って、さっさと逃げますか。呷さん？」

「もう変装がバレたんですか……早いですね」

「お前だって、俺のことを本名で呼んでただろうが。変装して俺に近づいて、何をしたいんだよ。俺は里に帰る気はないぞ？」

コガネがミドリを睨む。呷は晦をにらみ返す。改めた名前と騙すための名前。その二つがにらみ合う。

「まあ、こんなところで、睨み合っていても、仕方がないですよ
ね」

ミドリが睨むのをやめる。仕方なくといった感じで、コガネがそれに続いた。

「で、お前らの目的はなんなんだ？俺なんかを追ってもしようがないだろう？」

「いえいえ、晦君は、忍者の里でもピカイチの強さだったんですよ？自分で理解してます？まあ、変装術は僕に敵わないんですけどね」
ミドリが尊敬半分侮蔑半分というような調子で言った。

「まてまて、俺はお前ら全員に対して、敵わないような術が一つ以上あるんだよ。どこがピカイチの強さだよ」

昔の自分を思い出しながら、コガネが言う。

「いえいえ、晦君はピカイチの強さでしたよ。汎用性という面で」

当然のことのようにミドリが言う。

「どーせ、俺は器用貧乏だよ」

自嘲するように、コガネが言った。

「とりあえず、さっさと鍵とって帰りましょうよ。面倒ですし、こんなところにいるよりさっさと里に帰りたいですね」

「俺はこっちにいるぞ……」

「いえ、連れ帰るまでが任務です」

「破棄する。速攻で破棄する」

「早く回収してくださいよ。破棄させませんから」

仕方ないような調子で、コガネが三人に麻痺毒を射つ。そして、宝箱を開ける。

「おお。かつけえな」

そういった先には、金色に輝く鍵があった。

「ただの成金趣味じゃないですか？」

「鍵の持ち主に殺されるぞ？」

そう言って二人は、部屋を出ようとした――

ニセクロとシースは走っていた。またかよ、と思うかもしれないが、走っていた。

「おい！ ギンママシが倒れたのはわかったが、その後の勇者共はどうなっている！？」

ニセクロが叫ぶ。

「知らないわよ！ 部下からの報告では、『鍵の間』に勇者以外の不確定因子が侵入したらしいわ！ 絶賛戦闘中よ！」

「まじかよ！ 不幸だな！ 俺ら」

叫びながらも。走る、走る。

着いたときにあつたのは、寝転がる勇者、寝転がるその仲間、そこに立つ――友人。

「コガネ！？」

反射的にニセクロは叫んだ。隣のシースは、呆れ半分驚き半分といった表情で、ニセクロを見た。

「ニセクロか？」

コガネが振り向く。横に居たミドリも一緒に振り向いた。

「なんでお前がこんなところにいるんだよ？」

ニセクロが言う。言った後に、少し思案して……

「いや、依頼の場所がここだった」

思案した答えとコガネが言った言葉は同様の意味だった。そして、シースが横をむき、

「この人たち、誰？」

と聞いた。

「ああ、俺の人間の時の友達。コガネだ。隣にいる奴は「人間の時の友達？」え？」

ニセクロの説明を途中でコガネが切った。人間の時の友達ということは、人間ではない場合があるのでは、とコガネは思ったらしい。「いや、うん。まあ」

歯切れが悪い様子で、ニセクロは呟いた。コガネは何か事情があるんだな、と察した様子で達観することを決めたようだったが、横に居るミドリが、

「歯切れが悪い返事をしてないで、しっかり答えてくださいよ」と、言った。

「まあ、ぶっちゃけるとさ、俺、魔王なんだわ」

ニセクロが本当のことを言う。コガネは納得し、シースは顔面蒼白になって、横を見る。

「あんた、何言ってるの？」

常識的に考えれば、人間の世界で、魔王なんてことを言えば、頭が痛い人扱いされるだけだろう。だといえ、本当のことを言うのは魔物内で、結構問題らしい。

「いや、コガネは、昔からの付き合いだしさ、確か三年くらいだよ」ニセクロが釈明をする。それでもシースは納得しない様子で、

「じゃあ、その、コガネ？君はいいとして、横にいる、そういえば名前を聞いていないわね。まあ、全体的に青っぽいから、蒼ちゃんでもいいわ。その、蒼ちゃんは、どうするの？」

コガネとミドリは、惜しいなーすごい惜しいなーと思い、ニセクロは、緑色と青色つて、微妙な関係だよなーと的はずれなことを考え、答えるのを忘れた。

十数秒後、待っているのに飽きたシースが、

「ちよつとお？ 聞いているの!？」

と急かした。それで、思い出したのか、ニセクロは、

「おう、多分大丈夫だろ」

と樂觀的なことを言った。

「適當すぎない？」

「大丈夫、なんか、普通の人間の気がしないから。雰囲気的にさ、ミドリちゃんは」

一瞬でミドリは殺気を持つ。

「まあまあ、殺気なんて収めて、話し合いをしようぜ」

先程までと変わった雰囲気で、ニセクロが言う。

「なぜお前がここにいいのかは聞かないでおく。お前が魔王だというのもスルーしておく。そして、お前はここで戦闘をする気は無いということか？」

コガネが言う。

「まあ、そういうことだね。と言っても、その鍵は返してもらおうけど」

ニセクロが平常心を戻しながら言う。その言葉に、忍者側二人はひどく驚いたようで、

「「は？」」

と、疑問の声を上げた。横にいるシースが、鍵の回収はしないとまずいと言うことを思い出す。

「なんで、この鍵を返さないといけないんだ？」

冷静になったコガネが言う。

「それ、俺らのなんだよね。具体的に言うとき、魔王城の鍵なんだわ」

ニセクロが説明する。それを聞いたコガネが驚き、
「俺はそんなものを取る依頼に付き合っていたのか!？」
と驚愕を露わにした。

「まあ、そうなりますね」

反省の色は全く見せずに、ミドリは言った。

「で、返すの?」

コガネはミドリに聞く。本心では返したいのだろうが、依頼人の横だ。うかつな行動は出来まい。

「返しませんよ。もちろん」

当然のようにミドリが言う。

「それは、オレら二人に喧嘩を売るってことでいいんだな?」

にらみながら、ミドリにニセクロは言った。ミドリは睨まれたことに若干苛立ちながら、

「まああなたたちが僕たちに勝てるとは思いませんけどね」

と、挑発するように言った。横に居たコガネが、

「本当に戦うのかよ……今代の魔王と言えば、最強と名高いぞ……」
そう言った。だがミドリはそれを制して、

「魔王が先頭をしたことはほとんどなく、だいたいの魔王討伐兵士は、部下に殺されて帰ってきてますね。魔王自体が大したことがないという可能性が高いです」

と、言った。完全に馬鹿にされたのが分かったのか、

「おい、それは本気で行っているんだな?」

と、怒りながら言った。一触即発。そのような雰囲気のみドリとニセクロを、それぞれの隣にいるコガネとシースが防いでた。

「ちよつとお、わざわざ戦うことはないでしょう。別に魔王城の鍵を別のものにするくらい造作もないことでしょうし」

と、シースが言った。それを聞いたコガネは、なぜ最初から偽物の鍵をここに置かなかったのかと考えた。言葉から嘘がわかる、真

贗鑑定士は、国家に一人程度しかないはずだ。

「この国にも一人いますよ。真贗鑑定士。だいたいの噂はそいつが調べるので、魔王軍はデマを流すのは厳しかったのでしょ」

コガネが思ったことを見透かしたようにミドリは言う。

「そうか……」

それに対して、コガネが返す。そんな二人を見て、ニセクロは「まあ、そんなとこだよ」

と言い。

「じゃあいいよ。鍵は変える。勝手に持ち帰っとけ。その鍵は」

そう言った。そこにどんな心境の変化があつたのかはわからない。

「そうか……」

と、コガネが言うと、

「じゃあな」

最後の別れのように、コガネは言った。

フウセンが起き上がると、そこに見えたのはソラとアカネが寝てるところ、開けられた宝箱、倒れたギンナムシ。その瞬間、フウセンは理解した。俺たち勇者パーティーは、敗北者になったということ。

そこからのフウセンの行動は迅速だった。剣を返すことはしなければならない。それは、直接王に合わず、宰相に返した。ネチネチと小言を言われたが、

「もう、僕たちは負けたんですよ」

そう言つて、逃げた。

「なんでこんなことをするの？ 魔王を倒しにいかないの？」

そう、アカネは聞いた。フウセンは答えられない。世間から認められないから正義を捨てた。そんな自分の姿は見せたくない。だが、敗北者は惨めな末路しかたどれない。セーブのないのだから。

それからフウセンは、逃げるように王都を後にした。ソラは、何かを理解したのか、何も言わずに付いてきた。アカネは……理解で

きない行動をするフウセンに愛想をつかした……と、フウセン自身は語っている。

逃げた。逃げた。王都の記者は、勇者に対して取材を試みようとした。だが、それはフウセンたちの長旅によって培われた経験によって、躲された。フウセンが、

「しつこかったですね」

と、にこやかに笑うと、

「そうだね……」

と、ソラは悲しげに答えた。

フウセンは、小さい農村についた。勇者だったということは隠し、村長のところに行く。

「お願いします。僕たち二人を、この村に住まわしてください」

そう、フウセンは言った。王都にいたら向けられる憎悪の目、落胆の目、侮蔑の目。僕はそれに耐えられうると思う。だが、ソラは？

そうフウセンが思ったことで、フウセンたちが王都を出ていくのは決定づけられていた。あくまで、フウセンのなかで、だが、誰も反対するものはいない。彼らは敗北者。日陰者なのだから。

「まあ、仕方ないな」

若者の目から、何を受け取ったのかはわからない。だが、村長はフウセンたちを受け入れた。

「有難うございます！」

本心なのか、建前なのかはわからない。だが、フウセンは感謝した。

「そうか」

と、一言村長はつぶやくと。

「金はあるのか？」

と、聞いてきた。フウセンは、

「はい、今まで達成した依頼で、一年程度は暮らせると思います」
少ない報酬で受ける依頼。ただの便利屋という名で勇者は依頼を受けた。その金も積もれば糧となるらしい。

「そうか」

また老人はつぶやき。

「家と土地は貸してやるよ」

こうして勇者は、農民になった。糧を作り、世界を支える。そんな職業。救えなかったんだ。支えたっていいじゃないか。

「私が言うのもなんだけど、本当に鍵を渡しちゃってよかったの？」

そう、シースは言う。

「鍵が古かったのは事実さ。壊されても文句は言えないほどもろくなっていたからな。こういうきつかけでも無いとさ、鍵なんて変えないだろ？」

そう言いながら、魔王城の鍵を壊す。バキッと、金属が壊れる音が響く。それを見て、ニセクロは、父親を思い出した。この鍵は父親に貰った鍵だ。それを、壊した。長い間使っていた鍵で、なかなか壊しにくかったのも事実だ。親の世代から使っていたのだ。古びて当然だ。親から託して貰った鍵は、コガネたちに渡した。また、会えるかな、と考え、戦わなくて、よかったな。と感じた。

「黙りこくってどうしたの？」

横に居たシースが聞いてくる。

「ああ、ちよつと昔を思い出してな」

もう、ニセクロは魔王なのだ。昔、親が魔王で、シースたちと遊んでいた日々は戻らない。遊び場のダンジョンは血肉で汚れ、親とのつながりである鍵は失った。

「あたらしい、伝統でも作ろうかな」

そう、ニセクロは呟いた。

「伝統？」

シースが聞き返してくる。それを聞き、ニセクロは怪訝な感情を持つのは当然だな、と自嘲する。いきなり伝統などと言われても、訳が分からないだろう。

「ああ、親の遺産……まあ、魔王城とかはあるがな。なんとなくだ。つながりとかあった気がするさ、鍵とかがなくなっただし、思い出の場所である、この場所も汚れた。ここは結構好きだったんだよな」
自分で言ってる訳が分からなくなってきた気がする。だが、続ける。

「それでさ、俺も次ぐ奴らに、何か残したいと思ったんだよ」
伝統とはつながるものだというのを、ニセクロは改めて認識した。
「やっぱさ、何も残さないのは……違う気がするんだよ」

言い訳じみた口調をシースは聞き、
「そうね」

と、一言答えた。そして、

「それには、まず子供を残さなくちゃね」
と、言った。ニセクロは一瞬訳が分からなくなったが、

「ああ、俺から言わせてくれ」

と、一言シースを制すと、

「昔から好きだった。結婚してくれ。一緒にさ、魔王軍をもっと発展させようぜ」

ニセクロがそう言っていると、シースは一言、

「ありがとう……」

そう言っていると、頬には一つ水滴が落ちていた。

二人は、魔王城に帰った。

「どうするかー」

海辺にコガネは居た。海の方こうを見る。島は……見えた。

「帰りましようよ、晦君」

コガネの昔の名前を、ミドリは言う。

「そうだなあ。またその名前を名乗ることになるのか……」

コガネは、軽く悲観する。

「大丈夫ですよ。きっと晦君の父さんももう怒っていませんよ」

「何年も無断で家を空けた息子にか？」

そう聞き返す。

「たしかにそうですね」

と、軽く笑みを帯びた風に言う。

「それでも、僕は、晦君を歓迎しますよ。ほかの誰でも拒んでも、晦君だけは」

コガネは悩む。目は宙を向き、どうするかと悩む。

「俺は、ここに残りたいんだけどな」

と、一言。

「そうですね……」

と、ミドリは言う。少し悲しげな顔になって、

「なんで僕が変装してまで、晦君に近づいたか、わかります？」

と、続けた。

「え？」

と、コガネは一瞬疑問を露わにした。冷静に考えると、それはおかしいことに気づいた。俺に近づきたいだけなら、昔の顔でも、全く問題はないからだ。

「それと、まだ『仮面』を付けている理由はわかりますか？」

正体を知っている俺に対して、なぜ仮面を解かない？ 所謂いえば、故郷の呷は、仮面を付けると、戦闘能力が……

「気づいたようですね」

一瞬で、コガネは戦闘態勢に入る。だが、既に動き出していたミドリの動きは止められない。驚愕に包まれた目。それが向けられていたのは、コガネの腹部。よけようと、一瞬の判断で、体を右にねじる。が、よけられなかった。

「また後で会いましょう」

そう言うと、コガネの意識は闇に包まれた。麻痺針を刺されたの

だ。悲鳴を出す間もなく、コガネは地面に倒れた。

「さて、どうやって日本に戻りましょうかね。まあ、晦君を連れて変えれば、忍者の里の権力争いで、上位に立てるでしょう」

そう一言、ミドリはつぶやき、あらかじめ準備してあった船を、探した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5847w/>

逃げた忍者は悲しみの魔王や正義の勇者と踊る

2011年12月13日21時50分発行